

窓辺

あんどろ
安藤 隆敏

「広角マクロ撮影」 のよくな見方

私の趣味は、自然の一瞬を写真に撮ることです。写真に関して、小学校国語科の教科書に「アップとレンズで伝える」という教材文があります。



望遠レンズ

ズを使いアップで撮った写真では、被写体の息づかいまで感じられます。広角レンズを使いレンズで撮った写真には、その場の全体状況が表されます。伝わるものに違いがあるので、意図

によって使い分けましょうという内容です。

私の場合、主にチョウを被写体としてきたので、アップで撮る写真がほとんどでした。撮影を始め二万数千コマほど撮りだめたころ、たまたま日本を代表する昆虫写真家と一緒に仕事をする機会がありました。写真を見比べる中で、アップで撮った写真は、チョウの体がくつきりと写し出された「いい写真」でした。でも、誰が、どこで撮っても違いが分かりにくい

と思いました。

アップの写真では被写界深度の関係で背景がぼけるため、チョウが生きている環境は写りません。生き物にとつて重要な情報が表されていません。

そこで、自分らしい写真を追究したいと思い、「広角マクロ撮影」を試すようになり、被写体から10cm以内で撮影する方法です。そのチョウが生きている環境の情報を残せる上、接近しているので中心の被写体も大きく写ります。この手法は、ものの見方にも当てはまると考えています。

(浜松科学館館長)